奥信濃文化

第41号

別刷

◆目　次◆

寺町で育まれた人々……村松　和夫……1
飯山の道路元標（飯山地区・瑞穂地区）……植田　平……6
今は無き・小菅の棚田……吉原　正治……9
古墳とは何か？世界性をもった古墳定義の提唱……松澤　芳宏……13
○飯山市綱切橋の由来を考える……松澤　芳宏……16
国策「満州開拓」の悲劇から平和のために問うべきもの……藤木　義博……19
明治期における感染症と祭礼……望月　静雄……25
発掘された「ちっちゃいもの」……飯山市ふるさと館……30
あとがき

2023年10月

飯山市ふるさと館友の会

飯山市綱切橋の由来を考える

松澤芳宏

飯山では誰でも知っている綱切橋の由来、その真実を誰でも考えたくなる。明治６年９月、船橋が架かる以前、俗称「綱切の渡」があったことは周知されており、その渡しは綱を川面に渡して、舟の往来をたやすくする方法がとられていた。それを、江戸時代には「くりつな渡」とも呼んでいたようだ（注１）。

綱切の渡しの伝承は江戸時代を通じて在ったものと推定される。縄切の渡の初出は、下木島新田の開発に絡んで、慶長１６年頃に作成された４月１３日付けの堀丹後守直寄書状　（『飯山町誌』１１１頁）である。

その書状にまだら山（斑山＝斑尾山）からとい板（樋板）の材料を「縄切渡」に着くように、人足に申し付けている内容が記されている（注２）。

もっとも、綱切の渡し伝承が具体的に探れるのは、江戸後期の文化年間以降に成立した軍記物『甲越信戦録』である（注３）。もとより、これは確実な史料ではないが、つぎのような内容の大意が記されている。

綱切橋の景観　千曲川右岸より撮影

「永禄四年の川中島の戦いで謙信公は、和田喜兵衛と主従二騎で高梨山を左に見て、落ちのびられ、下木島に出た。そこで、一人の翁に出会った。翁は敵が後から来たら、小菅山に行ったと欺いてくださいと言って立ち去った。謙信公らは、この人は小菅権現であろうと拝み、安田の渡しを渡られた。家来の喜兵衛が水面に張り渡した大綱を切り落とし、追っ手を防いだ。これより安田の渡しを『綱切の渡』というようになった。」

この『甲越信戦録』の記述は、江戸初期に集成された『甲陽軍鑑』の影響を受けており、『甲陽軍鑑』には、謙信が和田喜兵衛という侍と主従二騎で、高梨山（中野市方面）をめざして退いたという内容が記されている（注４）。

但し、江戸前期成立の越後系軍記物の『川中島五箇度合戦之次第』（注５）には、謙信は長沼まで引いて越後に帰ったと記すから、これは俗称北国街道筋の退却ルートである。謙信の退却ルートは

甲越双方の軍記物類の記述が違っており、また上杉政虎（謙信）に関する退陣の根本史料がないことから、**高井郡から飯山そして春日山城への謙信の退却は、今のところなんとも言えないのである。**

綱切橋のレリーフ（千曲川左岸）。上杉謙信が追手を逃れるために綱を切ったという場面を表している。

綱切の渡し以前は、縄取の地名が初出で、永禄１１年１１月１７日付け「武田信玄朱印状」に、信玄は市川新六郎に先約により「**縄取より下**（高井郡安田以北）」を宛がい、御地利（とりでのこと）を築かれよと命じている内容が載っている（**注６**）。縄取はもちろん綱取で、繰り綱渡しの意味であろう。

ちなみに、天正１０年（１５８２）６月２日の織田信長の急死あたり、上杉景勝が同年 6 月 16 日に市川治部少輔（信房）に出した上杉景勝宛行状案〔上杉年譜『信濃史料第 15 巻』所載〕に「今般忠信あるべきについて綱取（飯山市安田）より奥郡の年来所務の所を出し置く」とあることから、綱取の字の初出がみられる（**注７**）。

先に弘治２年（１５５６）には市川孫三郎は安田氏（安田高梨氏）の安田遺跡を武田晴信より宛がわれているが、これは敵方の飯山の目前であり、いわば約束手形に近いものであり市川氏がそこに居住することは不可能である。

やや脱線するが、市川氏が現木島平村の計見城（居館）に在陣するようになったのは、先の文書にあるとおり永禄１１年をやや過ぎた時代であり、武田氏との軍事的緊張がやや緩和してくる時代である。計見城は木島平村字小路付近にある平城で、『長野縣町村誌』によると、付近に馬場・責場という地字があるという。

また、付近の「たな」と称するところに山城があり、付近の平沢城も規模が大きい。その地域はかつての毛見氏一党の遺跡であったとされる。計見城は毛見氏一党ともされる本栖（もとす）氏の旧城館を整備拡張したとも考えられている。

平城の計見城については、現在は、宅地や耕地整理された水田になっており、残念ながら、その跡を探ることは出来ない。「真宗寺（しんそうじ）由緒書」によれば元禄３年（１６９０）に起きた土砂崩落で館は埋没したと伝えている（**注８**）。

さて本題にもどり、安田の綱取の呼称については、「正徳三年（１７１３）水内郡飯山町諸式差出帳」（『木島村誌』６０８頁）に「綱取上綱取場」とあり、『甲越信戦録』にも今は誤って綱取の渡といっているとの記述があるから、実は江戸後期にも綱取の渡は正式名であったのである。

綱切の名称は俗称として江戸前期から見られたが、江戸時代を通じて綱取の正式名があった。それが一般的に綱切の渡となるのは『甲越信戦録』が大きく流布するようになった江戸末期からのことであろう。

そこで、問題となるのが綱取の名称で、本来は繰り綱渡しであるのに、綱を取り除く意味に理解されてしまったことから、『甲陽軍鑑』の、謙信が主従二騎で高梨山を目指して落ちのびたとの記述に影響されて『甲越信戦録』などにみられる綱切の渡し伝説が江戸時代を通じて出来上がったのではないかとも考えられることである。筆者などはそのように考えるが、真相は不明である。

もっとも、謙信が主従２騎であるとの伝承とは別に、大勢の上杉方退却隊が、綱取の渡しを渡り終えた時点で、綱を断ち切ることはあり得ないことではない。

いずれにしても、ここまでくると観光振興の立場からは阻害視される考えかもしれないが、事実を究明するには根本史料の不足があろう。

因みに、永禄 4 年と推定される 10 月晦日付けで信玄は京都清水寺成就院へ書状を渡し、伊那郡面木（おもぎ）郷（伊那市）を寄進し、また来春上杉残党の立てこもる市川・野尻両城の落居を待って、万疋の地を与えようと約束した（注９）。

これは永禄 4 年の合戦直後、野尻口、市川谷口（県境の千曲川筋）にまだ相当数の上杉方兵力が残っていることを示し、上杉政虎（謙信）軍の退却軍勢が主従２騎であるという俗説に相反するものであることを強調しておきたい。

参考文献

（注 1）『木島村誌』より類推。江口善次「水内郡と高井郡との交通」『木島村誌』所収、飯山市公民館木島分館刊行、１９７２年。

（注２）金井喜久一郎「綱取より綱切へ」『飯山市誌歴史編上』第二編第四章第三節所収、飯山市刊行、１９９３年。

（注３）岡澤由往訳『甲越信戦録』龍鳳書房刊行、２００６年。

（注４）腰原哲朗訳『甲陽軍鑑（中）』１４２頁、教育社刊行、１９７９年。

（注５）井上鋭夫校注「川中島五箇度合戦之次第」『上杉史料集（下）』１２７頁所収、新人物往来社刊行、１９６７年。

（注６）「武田信玄朱印状案」『信濃史料補遺巻上』４４２頁所収、信濃史料刊行会、１９６９年。「武田信玄朱印状」（当時釧路市個人蔵から現在は山梨県立博物館蔵）『飯山市誌歴史編上』の３４７頁に写真掲載、飯山市刊行、１９９３年。

（注７）注２と『信濃史料第 15 巻』を参照。

（注８）樋口和雄『古文書が語る信州秋山郷の原風景』ほうずき書籍刊行、１９０頁、２０２２年。

（注９）「山ノ内町温泉寺所蔵文書」武田信玄書状『信濃史料第１２巻』３７５頁所載１９５８年。

（本稿はインターネットの『松澤芳宏の古代・中世史と郷土史』の一項である「飯山市綱切橋の由来を考える」【２００９・１０・１６記、２０１０・９・２８更新】に、若干の修正を加えたものである。）

まつざわ・よしひろ（飯山市秋津地区在住）